

はじめに

人間は死ぬとどうなるのだろうか。

土に帰るか、空気になるか、それとも死後の世界を生きるのか、科学の世紀といいな
がら謎なぞに包まれたままである。

若いころはこの種の話題についてあまり興味を持たなかったわたしが、その思いを深
くするようになったのは、師匠である父を失ってからのことであった。それ以来、親し
くしていた人々との別離を迎えるたびに、思いをめぐらすようになった。

死後のことなど誰も考えたくない。けれども事故や事件、天災もあれば、いきなり不

治の病を宣告されることもある。何が起こつても不思議ではない時代。わたしたちはまさに死と隣り合わせの日常を過ごしている。

だが、ほとんどの人が死というものを意識のはるか彼方に追いやり、他人の葬儀に臨んでも、自分はまだ大丈夫だと考える。死を考える暇もないほど生に追われる現実かもしれないが、死を考えずして本当の生が開けるのだろうか。

死が間近に迫っていることを知れば、生きてることそのものに対する幸せを実感できずはであるが、その根本的な喜びを見出せないところに、今の日本の暗さがあるように思う。

現代において、モノの豊かさが必ずしも幸福をもたらさないと認識は広まったかに見えるが、死を遠ざける者は生からも遠ざかるという真理は、まだよく理解されていない。

いずれ、わたしたちにも生の完結が訪れる。充実した人生でなければ死の重みとのバランスが取れないし、だからこそ今この瞬間を濃密に生きなければならぬ。死から目をそらした人生は本質を見失い、いくら花開いたとしてもどこか根なし草のような寂しさをともなうはずである。

充実した生とは何か、今という時代にあつてどうすれば体得できるのか、本書の目的は、死後の世界を踏まえた生き方のヒントを示すところにある。つまり、死すべき存在としての生のありようということになる。

死後の世界について書かれた著書は数知れず、わたし以上に研究されている人も少なくない。だが、ここでは他人の説には従わず、自らの体験と思索しきくに基づく考え方を述べていくことにする。

これからますます心の悩みが増えていく時代。この厳しい現実をどのような心構えで生き抜けばいいか。布施ふせで生かされているわたしには、心の持ち方、思い方を説くとべき義務のようなものがあるように思う。

「哀しみの世に生きる」シリーズの完結編である本書が、「命」について考える人の参考になれば幸いである。

命この妙なるもの●目次

はじめに..... 1

第1話 充実した生の完結..... 11

愛すべき子どももの死..... 12

仏陀の死..... 16

師匠の死..... 18

死の形態はどうでもよい..... 22

覚悟を決めるとき..... 25

葉上の朝露のように..... 28

老病の淵に輝くもの..... 33

「ありがとう」の総決算..... 36

第2話 人間は死ねば靈魂になる..... 43

恨みは昇天の道を閉ざす..... 44

靈魂は命を寿ぐ本体..... 49

靈魂の動きと実態..... 52

第3話

執着しやくちやくを断ち切る幽界ゆうかいの修行

幽界は心を洗い浄める場

「通知」ということ

「請望」ということ

「報仇」ということ

「寓食」ということ

憑依ひょういと呼ばれるもの

「お祓い」は追っ払い

お施せ餓鬼がき供養の不思議

第4話

靈魂が昇天するとき

「もう、あなたとは別れます！」

「まだあの世へは逝けない」

どこへ昇天するのか

..... 59

..... 60

..... 69

..... 72

..... 78

..... 80

..... 82

..... 86

..... 89

..... 95

..... 96

..... 102

..... 107

第5話 靈界のさまざまな光景

陰湿と怪奇の地獄

靈界の授業風景

夫婦は靈界で同居できるか

ルールとしての「輪廻」

自我を仏心に溶かす

..... 115

..... 116

..... 119

..... 124

..... 126

..... 131

第6話

慈悲と憂愁の仏界

憂いに満ちた仏の世界

尼僧が知った神仏の苦勞

虚空にそびえる宝塔

..... 135

..... 136

..... 139

..... 141

第7話

慈愛と調和の神界

一滴の水にすぎなかつた人間

思いやりと感謝が真理の秩序

..... 149

..... 150

..... 154

第8話 充実した生の果ての静かな終わり

宿命の道を歩まれた師匠

..... 160

誇り高い法悦の瞳

..... 167

「寒苦鳥」の巣づくり

..... 178

第9話

「命」の現代的考察

..... 187

臨死体験に見る「わたし」

..... 188

「脳死」は人の死か

..... 190

臓器の記憶

..... 193

脳の中枢から独立した靈魂

..... 197

宗教と医学の関係

..... 198

第10話

なおも輝く仏陀の法灯

..... 203

今という濁りの時代にあつて

..... 204

ありのままにして恥じない心

..... 208

おわりに

.....
215

010

第1話 充実した生の完結

充実した生の完結

愛すべき子どもの死

早春の柔かな光が講堂に降り注ぐ中、とある高校の卒業式が行われた。

教育振興会の役職上、来賓らいひんとして招かれたわたしは、「仰げば尊し」を合唱する子どもたちを壇上から見守った。涙で歌えない生徒もいる。無理もない。きずなを結んだ仲間との別れ目なのである。

三百十七名の卒業生を代表する女子生徒の答辞とくじの一節だった。

「人間には等しく死が与えられています。だからこそよりよく生きようとするのだと思います。わたしたちもA君の分まで、悔くいることのない人生を歩もうと思います……」
力強い答辞に感動しながら、わたしは二年前の悲しい別れを思い出した。

A君は中学二年のころから入退院を繰り返していたが、高校一年の冬、脳腫瘍のうしゅようのために十六年という短い生涯を閉じた。

お通夜するとき斎場に入ると、正面に掲げられた遺影のあどけなさが痛々しかった。ご遺族はわたしたちをねぎらうように迎えてくださったが、内心の悲しみはいかばかりかと思いやられた。

ハラハラと舞い散る桜をはかなくも美しいと感じることはあっても、我が子の死を客観的に受容することはできない。それでも人の世の濁りを知らず、純真なままに精いっぱい生きたのだから幸せである。

人並みに長生きしたとしても、思う存分、生の充実感を味わって終焉しゅうえんを迎えられる人が世の中にいったいどれほどいるだろう。

健康に恵まれ、やりたいことをやって楽しく生きている人の傍らかたわらで、働いても働いても生活が楽にならない人や、重い病を患わづらって、望んだことは何もできず、日々を精いっぱい生きるだけで一生を終える人も少なくない。

ただ、子どもに先立たれた悲しみは体験した者にしか分からない。それはやり場のない怒りと切なさをとまなう。なぜ自分の子どもだけが死ななければならないのか、本当

に神はいるのか、いるのならその理由を聞かせてほしいと叫びたくなるのも無理はない。こうしたケースの場合、残された家族がうつ病、不眠などさまざまな心身の変化に苛まれることもある。気持ちの中に悲しみを押し込めるから、心身が反応してしまうのである。

また、子どもの死によって家族のきずなが深まればまだしも、心の支えがなくなつて離婚したり、親が闘病中の子どもにかかりきりになつた結果、ほかの子どもがグレてしまふケースも少なくない。子どもを失つた悲しみから抜け出るまでには、険しく遠い道のりを要する。

仕事柄、わたしはこうした悩みの相談をいくつか受けてきたが、宿命や運命という紋切り型の理屈で説得して片づく問題ではないだけに、気休めな言葉などかけられるものではない。自らの悲しみをありのままに表現させる以外、気持ちを整理させる術がないことを知つた。

たしかに、人間には肯定性にあふれた人生と否定性に満ちた人生がある。これを不平等と嘆いたところで仕方がないが、充実した生という観点からいえば、長命か短命かという時間の問題よりも心という中味の問題なのである。

現世の不平等を解消する論理として、心とか死後の世界を持ち出すつもりはないが、流れによどんでばかりいても生せいは腐敗ふはいする。

遅かれ早かれ、誰にでも「最後の卒業式」が訪れる。時がたつのは早い。人生は無帰路であり、今という日々は二度と帰ってこないのである。

経文の中に「一夜賢者経」（増谷文雄訳『阿含経典 第五卷』筑摩書房）と名づけられた仏陀の教えがある。

過ぎ去れるを追うことなかれ

いまだ来らざるを念おもうことなかれ

過去、そはすでに捨てられたり

未来、そはいまだ到いたらざるなり

されば、ただ現在するところのものを

そのところにおいてよく観察すべし

揺ぐことなく、動うごずることなく

そを見きわめ、そを實踐すべし

ただ今日まさに作すべきことを熱心になせ

たれか明日死のあることを知らんや

(以下略)

仏陀の死

仏陀は余命いくばくもないころ、仏教の聖地・靈鷲山りょうじゆせんを下りて、弟子の阿難あなんをしたがえて、母国へと旅に出られたことがあつた。靈鷲山から生まれ故郷までは約六百キロという道のりであるが、生きているうちに一目だけでも、すでに滅び去つたふるさとを見ておきたいとお考えになつたのだらう。

しかし、バイシャリの街を過ぎた途中のパーバーという村で、鍛冶屋かじやの息子チユンダが提供したキノコ料理による中毒が原因で、激しい痛みに襲われる。雨期を過ぎされたバイシャリで、すでに体調が思わしくなかつたせいもあるが、それはいいよ出血性の下痢げりをとまなうようになった。

それでも苦痛に耐え、「チユンダが責められるようなことがあつてはならない」と気力

をふりしほつて、立ち上がるとその村を後にされた。雨期後のインド。その灼熱しやねつの大地を、弱々しい足取りで一歩一歩進まれたのであろう。

やがてクシナガラという村に到つて、沙羅さらの木陰に一枚の衣を敷くと、その上に身を横たえてついに終焉しゆうえんの時を迎えられる。

容体重く、病に臥ふせられている仏陀ぶつだの傍かたわららで、阿難はしゃくり上げるように泣いていた。そのありさまをご覧になり、仏陀はこう教えられた。

「やめよ、阿難よ、悲しむなかれ。嘆なげくなかれ。かつてわたしは説といたではないか。すべて愛するもの、好むものからも別れ、離れ、異なるに至るときが訪れるということ。この世にあるもので壊れぬものはない。お前はわたしによく尽くしてくれた。これからは法を灯火とし、自らを灯火として生きよ」

今から六年前、ちょうど入滅された時期と重なる二月、大きな太陽が西の彼方に沈もうとするころ、わたしはこのクシナガラの地を訪れた。

そして「涅槃堂ねはんどう」という建物の中で弟子たちとお経きやうを誦じゆしながら、いまわの際に残されたこの言葉を思い出して涙した。かけがえのない人を失うということがどんなにつら

いことか、わたしは身をもって体験させられていたからである。

ところで、「法を灯火として生きよ」という言葉は、仏陀という肉体よりも法に価値があるということを意味している。仏陀は法によって仏陀となられ、その法を伝えようとして生涯をまっとうされたのである。

阿難あなんはそれまで法を学び、その価値を十分に悟っていた。それだけに仏陀を失うことは痛恨の極みきまだった。柱を失うことは教団の瓦解がかいにつながる。それを崩壊させまいと、残された者が歩む道はまさにいばらの道である。

阿難は仏陀の入滅後、教法の結集に当たった。もっぱら長年にわたって聞法した教えを思い起こしながら、仏陀の心に己を溶かしていく修行に精進しやうじんした。

やがて肉体世界を去るころには、すでに自分の中には阿難という自我の存在はなかった。法の灯火を己の心に点ともし、自らを灯火とすることができるようになったのである。

師匠の死

わたしの師匠は、仏陀の勅命ちやくめいを受けて一宗を起こした人である。堂々とした、信念の

塊なまのような人であった。

師匠はその宗教人生において、人事百般の問題で求め来る人々の相談を受けられた。いつも腕を組み、目を閉じて心を静めながら、その問題の解決策を求め、寝食しんじきを惜おしんで救済に当たられた。

師匠には大局的に物事を把握はあくしていく力、未来を予見する力があつた。その智慧ちえと慈悲じを慕つて周囲には多くの人々が集い寄つた。出家して三十六年間、その力によって多くの人々が救われていった。

六十二歳の時、肺ガンという不治の病にかかられたが、それまで多くの人々を救つてこられただけに、「守護しゆごがあるはずだ。病気で死ぬはずがない」という強い信念を持つておられた。

加えて、宗教生命をかけて巨費を投じた大本堂建立こんどうの落成を間近に控えている時期でもあつたし、後継者育成もこれからという時であつただけに、生せいへの願望は強烈なものがあつた。

それはふつうの人が抱くような命への執着ではない。真実の仏法興隆こうりゆうという仏勅ぶつちくに応えるための苦惱であり、抵抗であつた。

けれども、いよいよ死を受容せざるを得なくなつたとき、それまでの葛藤に終止符を打ち、きちょうめんに死の準備を始められた。病室に置いていた生活用品を片づけるよう命じた後、弟子一人ひとりに将来の道を説き、今後の寺の運営のことや、建設最後の仕上げである境内の庭づくりや棺の位置、葬儀の仕方まで指示される一方で、仏陀へそれまでの人生を懺悔された。

やがて遺言書をしたためられると、「弟子たちへ」と題した最後の説法を、意識がなくなる寸前までなされている。

いまわの際の口述テープを聴くと、ふりしぼるような吐息の下から、わたしたち弟子のために説き残そうとされた思いの深さが痛いほど伝わってくる。

「一心に祈り……心を任せ……仏さまと心の融合ができるかどうか……できたならば自分が思ったのか、思わせられたのか……はつきりするでしょう……。わたしがこれだけ貴重な体験に基づいて説明をしている……これまでどれほど多くの実証と弁証をやつてきたことか……だから苦勞はないはずです。要は仏さまのお気持ちになつて……教えられたことをみんなに伝え、少しでも全体に対して慈悲の心を起こして……分かれようと努める、そういう努力と精進を忘れないでほしい……」

容体が急変したのは、「ちよつと休みます」と、トイレに立ち上がられて間もなくのことだった。息を引き取られたのは生前の言葉通り、一月八日の朝であった。

死の瞬間、美しい目で天を仰がれたが、それが閉じられた後の真一文字に結ばれた口元には満足感のようなものが漂っていて、何と見事な最期かと思つた。

弟子のわたしが言うのもおこがましいが、師匠は「無辺行」としての使命感に立ち、法華経を体読し、薄幸な人々のために身命をなげうたれた人だった。

「仏さまとの心の融合」——。これは自我を仏の教えに溶かすことであり、法の灯火を己に点す瞬間でもある。師匠は誰よりも仏陀を尊敬し、法の灯火を、心に点し続けられた人であった。わたしはこれくらい自分の生と死を直視した人に接したことがない。

後日、主治医の先生にお礼に伺つたとき、「回診に行くと、お父上はいつも経典を開いておられました。こんな人は今まで見たことがありません」と、涙さえ浮かべて話される姿にあらためて師匠の偉大さを感じた。

死の形態はどうでもよい

肉体よりもはるかに心に価値があるとしてみても、誰もが安らかに死にたいと願うのは当たり前前の話である。ただ、自宅で家族に囲まれて息を引き取ることが理想だとしても、それはなかなかむずかしい。

現実的には病院で口や鼻孔^{びこう}などからチューブを何本も通されて死を迎えるケースが圧倒的に多い。家族に何も言い残せないまま死を迎えねばならない医療とは何だろうと考えさせられることがある。

また、このような延命装置に接すると、こちらまで切なくさせられるが、その家族はずっと看護に当たるわけだから、想像を絶するつらさがある。看取^{みと}られる側も病魔との戦いに加えて、家族に済まないという葛藤^{かっとう}を抱えているはずである。

ガンということになると、看取る側と看取られる側に微妙なかけ引きが働くこともある。病名を隠している場合など、その表情の奥から何かを探ろうとする触覚のようなものが看取られる側には働く。

それもお互いを気づつかうゆえの光景であろうが、どうせ余命が長くないのなら、後顧^{こうこ}の憂^{うれ}いがないように旅立つ準備をしておきたいと思うのはわたし一人であろうか。

わたしの師匠は「覚悟を決める時間がある」と、つねづね話しておられたから、ろくばいと動揺を抑えながら、勇気を出してわたし自身が師匠に伝えた。

神仏に仕える立場の人間にガン死はふさわしくないかもしれないが、寝食を惜しんで修行や救済に没頭すれば肉体的な疲労は蓄積していく。

あまた多くの人々を救い続けられた偉大な師匠をガンで失うという現実には直面して以来、わたしはガンであろうと、心筋梗塞であろうと、そのような表面的な死の形態で人を哀れんだり、人間の価値を測ってはならないと思うようになった。

もとより、誰も自分の死期は分からない。だが、それが二十年先のことであれ、一カ月後のことであれ、生きている間は自分の心を高めていく貴重な時間帯なのである。傲慢さや執着などの心を洗濯して臨終を迎えなければならぬとすると、老いること、病気をすることも必要なのかもしれない。

死についても同じことがいえる。もし人間に死がなかったら、生の時間を浪費しても惜しいとは思わないだろう。死によって期限が決められているからこそ、今を大切に生きようとするはずだ。

人々の病氣平癒や幸福を祈るべき立場からすると、いささか不謹慎かもしれないが、

そもそも仏教は欲望成就という低卑な教えではない。肉体よりもはるかに心に価値があることを説いている。

かつて、仏陀は悟りをお開きになったとき、人間とは何かという根本について思惟され、そこから生きる現実に即した仏教を開教された。その教えは今なお「心の修行」として伝持されている。

その昔、日本には死人に白衣と手甲脚半の出で立ちに、首から錢袋を下げさせ、棺の中に杖を入れてあの世に送る風習があった。これは人間は死んでも死なない、あの世へ逝ってもなお心の修行が待っていると考えられていたからである。

今でこそ、こんな儀式も少なくなつたが、この道理をきちんと胸の中に入れておくと、生き方も少しは変わってくるはずだ。

心というものは生死という肉体の現象とは無関係の存在なのである。この確信に立つと、充実した人生も、後悔のない死も、死後の安楽も、いかに心の修行を先取りするかにかかっていることが理解できるようになる。

人生の価値は、何を持っているかという形ではなく、どういう人間であるかという質にある。死んでもすべてがなくなるわけではない。死の形態はどうでもいいし、年齢も、

死に場所も問題外なのだ。問題は、心を飾^{かざ}って帰れるかどうかにかかっている。

病気は肉体の病であるから、心まで病むようなことがあつてはならない。肉体の消滅とともに病苦からは解放される。また、人間は家族や友人などの心の中で永遠を生き、きらめく星のように見守ることもできる。

人生八十年の時代を迎えて、生老病死のうち、老病死の期間が長くなったのだから、今、一人ひとりが生と死の問題を見つめ直すべきである。モノや肉体や形式よりも心の尊厳というものに光が当てられなければならない。

人間は生きているのではなく、生かされている。だから、よりよく生きる努力をしなければならぬのである。

つまり、人生の充実ということに関していえば、老いにつけ、若きにつけ、今自分が己の命といかにかかわり、どのような姿勢で生きているかということが問題なのである。

覚悟を決めるとき

一般的に人間というものは他人の死に接してそれを悲しく思うことはあつても、厳密

には、まだそれは人ごとでしかない。たとえ自分が不治の病を宣告されたとしても、しばらくは半信半疑であり、苦痛の極みに達して次第に死の自覚が起こってくる。

本当に自分の死期が間近に迫り、「自分はもうすぐ死ぬのだ」という自覚を余儀なくさせられると、肌粟を生じるような気持ちになり、それまで時間を無駄に過ごしていた人も、限られた生を濃密に自覚し、残された日々を大切に生きようとする。

少し前まで、わたしの中にはいつも死への不安があり、心臓などに痛みが走ると、長く生きられないかもしれないという恐怖めいたものが襲ってきた。それは死そのものに対する恐怖というより、宿命をまつとうすることなく生を終えることへの不安であった。師匠を失ったとき、わたしには大本堂建設の膨大な借金が残されていた。

「欲を捨てよ。無欲でベストを尽くしていけば、神といえども恐るるに足りぬ。借金など問題ではない。法がありがたければ寺は栄える」

と、遺言されたが、世のため、人のためと私費を投じられたので、わたしは明日からの生活を不安に思ったこともある。未熟さ、器量のなさは自分が一番よく知っているだけに、苦難に直面するといろいろと愚痴も起こったが、無欲で修行に打ち込む以外になかった。